

## 失われたものを数えるな 残されたものを最大限に生かせ

当時、その娘さんは二十歳過ぎだったと思います。十歳の頃、象の足のようには片足がむくんでしまう特発性リンパ浮腫という稀な病気にかかり、多感な年代を周囲の目を気にしながら過ごされてきました。この病気だけでも辛過ぎることなのに、さらに不運は重なり、この病気に極めて稀に合併する悪性腫瘍が発生して私の勤務するがんセンターを受診されたのです。この経過から、専門医には病名がすぐに頭に浮かび、同時に極めて悪性度の高いがんで、生命の危険が差し迫っていることが分かるのでした。

彼女の場合、一旦膝上での切断を余儀なくされた後、さらに再発とリンパ節転移を来とし、2回目の手術で股関節離断（片脚全てを失うこと）と術後の放射線治療を受けて、ようやく一連の治療が完了しました。医療スタッフはそう遠くない将来、再々発を生じて長期の生存は困難とみていましたが、ここからこの患者さんの次のストーリーが始まりました。

片脚全部を失った後に用いる義足は、従来棒のようなもので実用性に乏しく杖に頼る生活が主でした。彼女はもう一度おしゃれをしたいと膝小僧も、細い足首も叶えてくれる義足を求めて東京へ向かいました。そこでおしゃれを楽しめる義足と出会ひ、もっと大切なことには、障害があっても幸せいっぱい過ごしているたくさん仲間と出会ったのです。

スポーツ義足の国内第一人者である白井二三男氏をはじめパラリンピック選手が、多く集うスポーツクラブに彼女自身もたびたび参加するうちに元氣を取り戻し、「夏に仲間と海水浴に行っただんですよ」と連絡をくれるまでになりました。

専門医を驚かせたのは、当時から15年以上経過しますが、がんはこの元氣さに尻尾を巻いて本当に退散してしまっただけで、彼女はそれまでとは全く異なる新しい人生を授かったのです。

表題はパラリンピックの父ルートヴィヒ・グットマンが遺した言葉です。この患者さんが歩んできた多感な時間を思えば、どれほどの苦しみであったか、誰も語る資格すらないように思えます。ただ「その苦しみを辛さを数えて何になる？」できる

### News!!

#### 装具外来が始まりました

6月より月2回、不定期ですが装具士さんが来院する体制を整えました。自分に合ったコルセットや靴インソール、脳卒中後の足装具やその修正など、都市部に何度も出向かなくとも当院で提供できるようになりました。固定力の高い治療用サポーターも使えるため、ギブスを用いずに治療できる範囲も広がっています。予約制のため、詳しくは整形外科外来までご相談下さい。



ことをやっていこうよ！」そう呼びかけてくれる仲間とめぐり合い、支え合って、人間とは苦難を乗り越えていける智恵も勇氣も持っている生きものなのです。この患者さんをきっかけに私が障害者スポーツの支援をするようになったことはご想像のとおりです。

余談になりますが、障害者の方から、ふとこんな言葉をかけられたことがあります。「健康人とは健康のありがたみを忘れた病人だ」

私はこれは敵対的な意味合いではないと思っています。きちんと歩ける体を持っているのに

寝てばかりで体力が衰えたり、治療法があつて健康を取り戻す術はあるのに自分で扉を閉ざしていたり、長生きできるところを恨んでしまったり。本来感謝すべきことも目の前の現実にかすんでしまうことは人の常。失って気づくことがないよう健康を大切にしたいという彼らの切実なメッセージだと思います。

ないものを嘆くよりあるものを活かす、万事に通じる言葉と紹介させて頂きました。

（文責 現パラリンピック自転車競技チームドクター 橋本伸之）

